

# カンボジアの旅

工藤君明 (神奈川県横浜市)

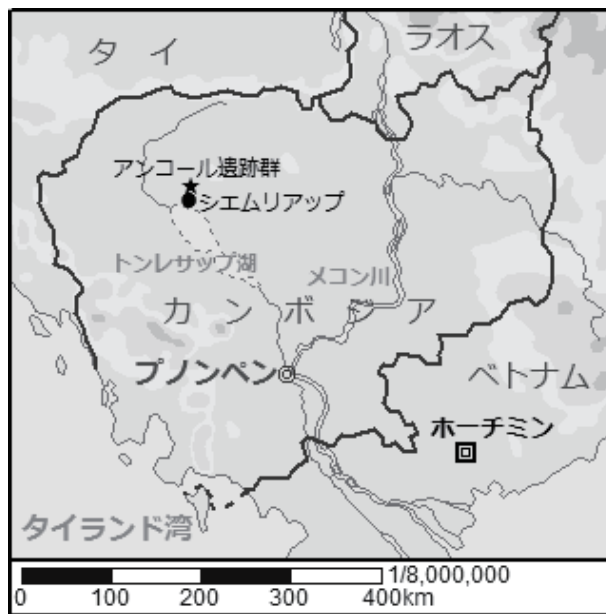
## はじめに

2018年1月31日(水)～2月5日(月)にカンボジアを旅行してきた。カンボジアのアンコール遺跡群はとてすばらしい、と観光に行かれた方はみなさんが異口同音におっしゃられるし、家内も是非とも行きたいと言ってきたが、これまで私は頑として拒否してきた。理由は二つある。まず、アンコール遺跡群が世界遺産となるにあたって、復興に尽力してきた日本の貢献はものすごく高く評価されるべきものなのに、復興されてしまったら単なる観光物に成り下がってしまったこと、もう一つは、クメール・ルージュの大虐殺に対する嫌悪感があったからである。

通常の観光ルートは、ハノイやバンコクから飛行機でアンコールに行き、また逆のコースで日本に帰るといものだが、家内が、成田からプノンペンに直行し、大虐殺の現場を見て、それからアンコールへ向かうというコースを見つけてきたので、それならば、と決意した。まず、カンボジア人自身が大虐殺をどのように捉えているのかをおもむろに勉強した。カンボジア国内では、その事件はあまりにも悲しくて、口にするのもおぞましいタブーとなっているが、少しずつ見つめ直そうという動きがあることを、カンボジア映画「シアター・プノンペン」(原題 The Last Reel、2014年)を観て知った。

## 四面仏

アンコール遺跡群については、あまりにも多くの解説書があるので、ここでは観光について、あまり触れない。アンコールは、日本の鎌倉時代のころに栄えた都であり、アンコール・ワットやアンコール・トムといった数多くの遺跡があるけれども、宗教的には雑然としており、背景を知らずに観ていると、なにがなんだかわからない。例えば日本では、もともと神道があり、仏教が入ってきて、いろいろ宗派にわかれているけれども、基本的には大乘仏教である。これはインドから北回りで中国に入り、日本に伝わってきたものだが、一部はベトナムにも伝わっている。一方、タイは上座部仏教(かつては小乗仏教と呼ばれていたが、それは差別用語とされている)が主流である。こちらはインドから南回りに、スリランカを経由して東アジアに広まったものである。この二つの仏教の違いは、なかなかわかりにくい。上座部仏教は、出家者が救われようというのが基本であり、お釈迦さまだけが信仰対象であり、それで大乘仏教から「小乗」とけなされたの



だが、大乘仏教は衆生を救うということで、信仰対象は如来もあるけれども、菩薩もたくさんある。例えていうと、上座部と大乘の違いは、国会の参議院と衆議院の違いといったところかもしれない。参議院なんかいないんじゃないか、というところは日本人が大乘仏教であることと根が繋がっているかもしれない。



アンコール・トムのバイヨン寺院にある四面仏の観音菩薩「クメールのほほ笑み」

そしてカンボジアにはヒンドゥー教も入ってきた。インドではかつて厳格な身分差別を基盤にしたバラモン教が腐敗してしまい、仏教が栄えるわけだが、カースト国家には、やっぱり仏教は合わなくて、ヒンドゥー教として復活し、仏教を追い出してしまった。そし

て後になって、仏教国にヒンドゥー教が押しかけてきたわけである。

カンボジアには、ベトナムの方から大乘仏教が、タイの方から上座部仏教が、その後からヒンドゥー教が入ってきて、くんずほぐれつの争いをして、わけがわからなくなってしまう、といったものがそのままアンコール遺跡群なのである。いちばん有名なアンコール・ワットはヒンドゥー教の神に捧げられた寺院である。アンコール・トムはアンコール王朝の都城であり、その中央部には石の塔が林立し、塔の四面には観音菩薩が彫られている、といった具合である。

このあまりの乱雑さに、観光客は理解することを諦めてしまい、芸術品として楽しむことになる。それはそれで、すばらしいものであるが、どうして四面仏なのかと疑問に思った。日本には、仏を四面に配置するというデザインはないので、とても不思議だった。塔が四角いから、という身も蓋もない説から、仏教の「苦集滅道」という四つ真理を表しているのではないか、あるいは「慈悲喜捨」という仏教の心を表しているのかもしれない。

### 生かしておいても地球の重み

プノンペンでは、午前中に王宮や国立博物館などを見てまわった。昼食後、トゥールスレン博物館に案内された。市内にある古びた学校といった佇まいである。校門を入ると、三階建ての細長い建物がコの字に並び、その中央に運動場がある。その隅にはサッカーのゴールをもっと高くしたような、ブランコの枠だけみたいなものがあった。横棒にはフックが三個、等間隔に並んでおり、その下に大きな瓶が置いてあった。あれはなに？とガイドに訊いたら、囚人を逆さ吊りにして、水を入れた瓶のなかにつこんで拷問する台です、とのことだった。

そこはかつて、クメール・ルージュ（赤いカンボジア）の時代の政治犯収容所であり、2年9カ月のうちに、2万人弱が虐殺された虐殺刑務所だった。校舎の教室を改造して政治犯を収容していたところを見てまわった。食べたばかりのランチを吐きそうなくらい、おぞましかった。ガイドによると、午前に案内するとランチが食べられなくなるんです、ということだった。ここから生きて出られた収容者はたった8人だけ。その一人チョン・マイさんが書いた「生還者」という本を買ってきた。妻も子もすべて殺され、収容所で拷問を受け、自白するまで拷問され、自白は嘘でもなんでも真実とされ、そこに出てきた名前の者が次に拷問を受けるという「真実」の連鎖ができあがってしまった。たまげたのは自白が几帳面に記されていることだ

った。拷問者は、おそらく真実が明らかにされることに酔いしれる科学者の気分だったのかもしれない。当時の標語が、「生かしておいても地球の重み、むしろ消しても損はない」というものだった。地球のスケールで見たら、人はちっぽけな生き物でしかない。映画「第三の男」で主役のオーソン・ウェルズがウィーンの大観覧車に乗っていて下界を見おろし、ここから見ていると人なんか簡単に殺せる気分になる、というシーンを思い出してしまった。

その「生還者」は技術者だった。自白調書を作るためのタイプライターが壊れてしまい、それを修理してあげたので、重宝がられて生き延びたらしかった。解放されてから東ドイツ（まだドイツが東西に分裂していた）に招待され、ポーランド国境のユダヤ人収容所に案内された。東ドイツ政府としては、ナチスがどれほど非人道的なことをやったか非難してもらいたかったのだろう。しかし「生還者」はその収容所を見て、二つだけ言ったという。ここにはシャワーがある、ベッドがある、カンボジアでは石の床に寝かされていた。もう一つは、ここで殺されたのはユダヤ人だけ、どうして殺されたのか理由はわかっていたでしょう。しかし私たちは、同じカンボジア人になんの理由もわからないままに殺されました、と。

クメール・ルージュの大虐殺は悲劇だと思う。しかし、よくよく調べてみると、喜劇だったのではないかと思えてくる。中国の文化大革命は大失敗だったとされたのに、その直後にカンボジアで悪の華が咲いた。中国では、旧文化と地主と官僚が徹底的にやっつけられたが、理工系の学生は将来のことを考えて、農村に温存された。だから中国の現指導者はみんな理工系の出身者なのだ。カンボジアでは、都会に住む者、知識がありそうな者、それこそメガネをかけているだけで、虐殺の対象にされたのだ。反省のしようもない悲劇は、私には喜劇にしか見えなかった。「歴史はくり返す。初めは悲劇として、二度目は喜劇として」という有名な言葉そのものだった。

帰りの飛行機で悪夢を見た。超高齢化した日本では老人と若者が対立している。老人は働きもせず、高額年金をもらい、のうのうと暮らしている。国家予算のほとんどが、医療費などに使われ、若者はいくら働いても暗い未来しかない。そうだ、カンボジアが都市居住者を片っぱしから虐殺したように、日本では、老人であればみんな殺してしまおう、「ヤング・ファースト」という政党を作り、青年社会主義国家を作ろう、と叫ぶ日が来たらどうしよう。そうならないように、老人は自分の趣味をもち、若者と対立しないようにしなければいけないのだろう